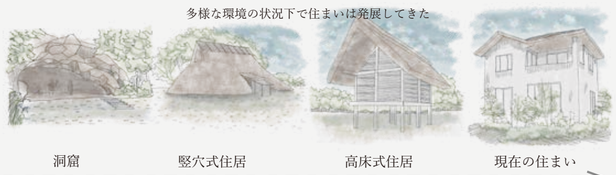
潮刻の道

ー満ちる道、干く干潟に暮らす海中道路のすまいー

月は遠くにありながら、いつも暮らしのそばにある。
佐賀県太良町では、月の引力が生む潮汐が海を動かし、海苔養殖や漁業、そして人々の暮らしを形づくってきた。
だが現代の住まいは、快適さと引き換えに、自然を読みながら暮らす感覚を失いつつある。
本提案では、潮とともに現れ沈む海中道路を生活基盤へと再編し、潮の満ち干きを読みながら暮らす新しい居住のあり方を提案する。
そこに、月と共に住まう新たな時代の住まいを描く。

01-a：社会背景 / 均質化する快適さと忘却された身体感覚



住まいは本来、単に外部環境から身を守る器ではなく、**その地域の風土や生業、文化や技術が交わる事物連関の中で進化**してきた。現代の住まいは、性能と設備によって環境を制御し、均質で安定した快適さを獲得した。しかし、その一方で、人が自らの身体で環境を読み取り、**暮らしを調整していく感覚は静かに失われつつある**。

01-b：社会背景 / いま、建築にできること



環境から切り離された快適さは、現代の暮らしを確かに支えてきた。だが、**内部だけで完結する住まいは、場所の固有性をも希薄**にしてしまう。そこで、いま、この社会に住まいをつくることは、内と外を隔てる境界という概念を問い直し、**周囲と連続する柔らかい関係性を構築すること**だと考える。建築と環境を等しく扱い、人の営みが風景へと滲み出すように、**住まいを環境の一部へと編み直すことが、その土地の未来を拓く重要な結節点になるはずだ**。

02-a：計画敷地 / 佐賀県藤津郡太良町・月の引力が見える町



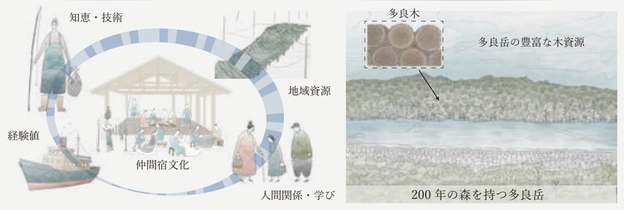
佐賀県藤津郡太良町は、**最大６メートルの干満差を持つ有明海の湾奥**に位置し、干満差を利用した様々な漁法や海苔養殖が生まれ、海苔養殖においては、**生産量全国１位を誇る豊かな産業資源**がある。２０００年の森を抱く多良岳と水神を祀る沖之島の軸線上につないだ海中鳥居は地域の象徴として観光名所で賑わっている。人々は水位の変化を潮汐と天体の律動を人間の営みに結び付けて、**暮らしと養殖、観光を形成**してきた。

02-b：計画敷地 / 風景化する海の農道と住まいから乖離する月の暦



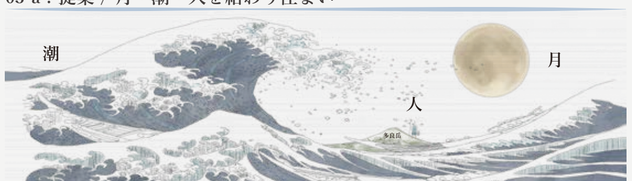
干満差が最も現れる有明海の水流沿いに海中道路と呼ばれる海の農道があり現在も海苔養殖を支える作業路として残っている。しかし、観光地化された海中鳥居と産業動線の海中道路、画一化された住宅街は乖離したままであり**月の暦とまちが一体となった地脈の通る風景はいまだ形成されていない**。

02-c：計画敷地 / 失われゆく潮待ちの文化と未活用資源



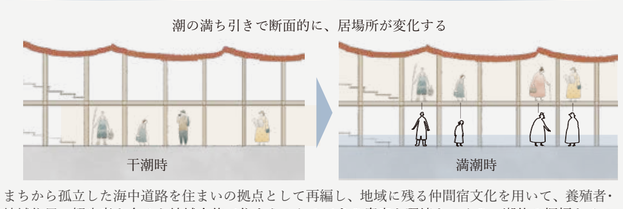
さらに、多世代が寝食を共にし、干満差に暮らしのリズムを同期させて潮と生きる文化を学ぶ**仲間宿文化は、育てる漁業への移行に伴い失いつつ**ある。また、町の面積の約 55%を占める多良岳にある**美しい木目と高い品質を誇る多良木も十分に活用されず**に残されている。

03-a：提案 / 月・潮・人を結わう住まい



太良の営みと生業・風景をつなげ、**天地に根付いたポテンシャルを長期的に遺していくことが新しい時代の住まいの重要なテーマ**だと考えた。そこで、本提案では、**月・潮・人の境界を再構築し、暮らしと月の暦を建築へ編み込む**住まいを提案する。

03-b：提案 / 太良のポテンシャルを未来に遺す



まちから孤立した海中道路を住まいの拠点として再編し、地域に残る仲間宿文化を用いて、養殖者・地域住民・観光者を含めた地域全体で住まうことのできる寛容な環境をつくる。潮位の振幅を６つのスラブ差へ変換し、**水位の上昇を受け入れる作業場と暮らしの場をつなげる**ことで、潮の満ち引きに応じて活動の場が変化し、月・潮・人の恩恵を享受する事物連関が生まれる。

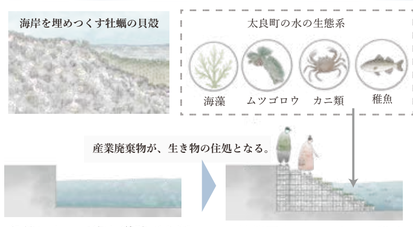
03-c：提案 / 月の時間で包み、固有風景として紡ぐ



そして、潮位差によるスラブと仲間宿文化の多様な活動を、**12.5 時間周期の月の時間を介したおおらかな大屋根で包み込む**。そうすることで、養殖者や住民、観光客など異なる時間軸で生きる人々が月の時間軸を感じながら暮らし、**太良の生きた風景としてこの星の後世に紡いでいく**。



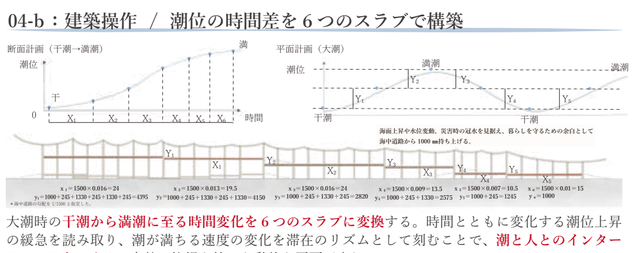
04-a：建築操作 / 海中道路の再編



海中道路は、作業用インフラとしての産業スケールの大きな段差があり、周辺には、海苔養殖に用いられる**牡蠣の貝殻の産業廃棄物によって埋め尽くされている**。

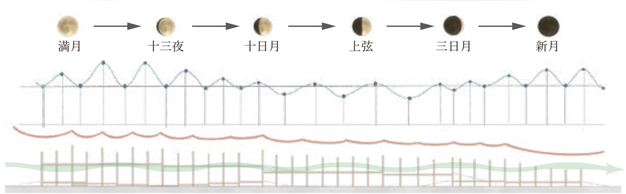
そこで、海中道路の段差を、**牡蠣の貝殻を用いて蛇篭の身体スケールで穏やかにつなぐ**。貝殻の蛇篭は、海水の水質浄化の効果を生み、人々の居場所や活動を拡張させる。

04-b：建築操作 / 潮位の時間差を６つのスラブで構築



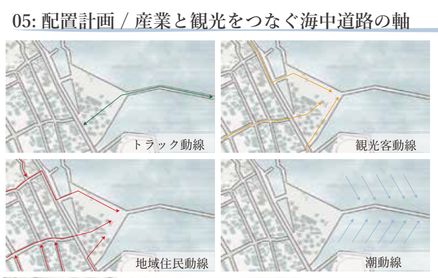
大潮時の**干潮から満潮に至る時間変化を６つのスラブに変換**する。時間とともに変化する潮位上昇の緩急を読み取り、潮が満ちる速度の変化を滞在のリズムとして刻むことで、**潮と人とのインターフェースをつくる**。自然の抑揚を持った動的な平面が表れる。

04- c ：屋根計画 / 朔望の周期を纏うひとつの大屋根



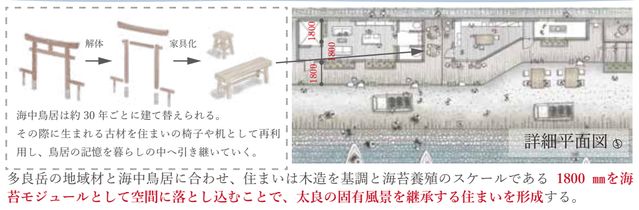
月の満ち欠けが描く 29.5 日の周期に着目し、**朔望に伴う大潮・小潮の振幅を連続する曲率の変換によって大屋根を形成**する。月の引力を表す屋根の反りが、多様な滞在や交流、営みを受け止め、**月の暦とまちが一体となった住まいを形成**していく。

05: 配置計画 / 産業と観光をつなぐ海中道路の軸



海中道路を境に南側にはノリ養殖の場、北側には海中鳥居の観光の場が分散して広がっている。そこで、海中道路の軸線上に建築を配置することで、南北の**正面性を曖昧にしながら安全な作業場を確保し、分散したまちの要素を穏やかにつなげる観光の場を創出**する。

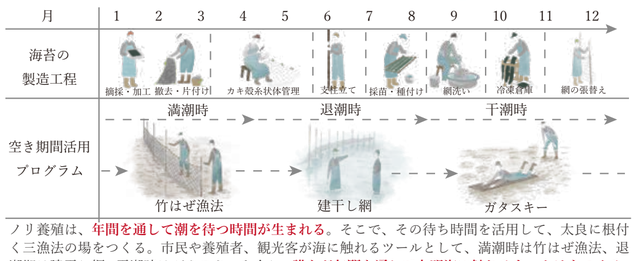
06-a: 住居 / 多良木と海苔モジュールによる住まい



海中鳥居は約 30 年ごとに建て替えられる。
その際に生まれる古材を住まいの椅子や机として再利用し、鳥居の記憶を暮らしの中へ引き継いでいく。

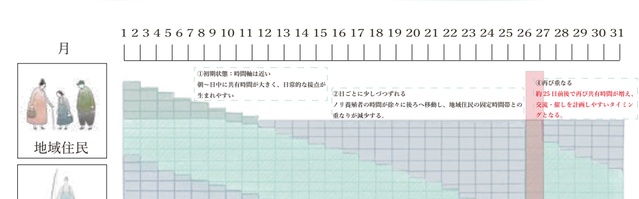
多良岳の地域材と海中鳥居に合わせ、住まいは木造を基調と海苔養殖のスケールである 1800 ㎜を**海苔モジュールとして空間に落とし込むことで、太良の固有風景を継承する住まいを形成**する。

07: 潮待ち時間を活用したプログラム

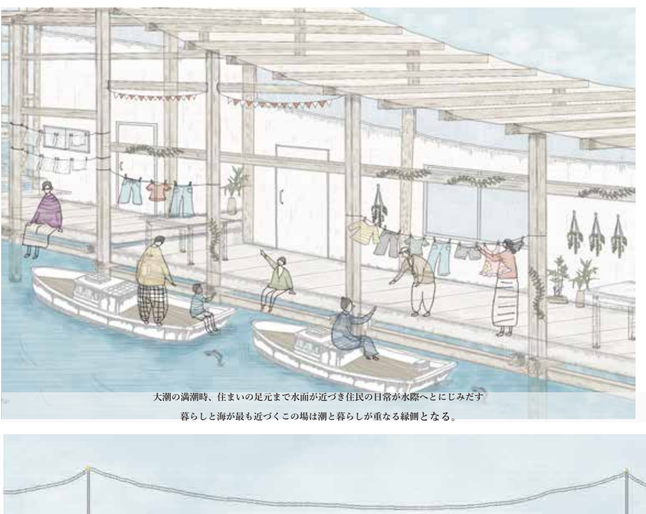


ノリ養殖は、**年間を通して潮を待つ時間が生まれる**。そこで、その待ち時間を活用して、太良に根付く三漁法の場をつくる。市民や養殖者、観光客が海に触れるツールとして、満潮時は竹はぜ漁法、退潮期は建干し網、干潮時はガタスキーを介し、**誰もが年間を通して有明海に触れるきっかけをつくる**。

08: スケジュール / 12.5 時間と 24 時間を結ぶ



潮と生きる文化である仲間宿文化を介して、暮らしと生業を共存する。月による 12.5 時間周期と２４時間周期のあいだにはズレが生じる。そこで、**25 日周期を軸に天地一体をゆるやかにつなぐ**。そうすることで、**地域文化を合理的かつ最大限利用した、太良における新しい住まいとして根強く築かれていく**。



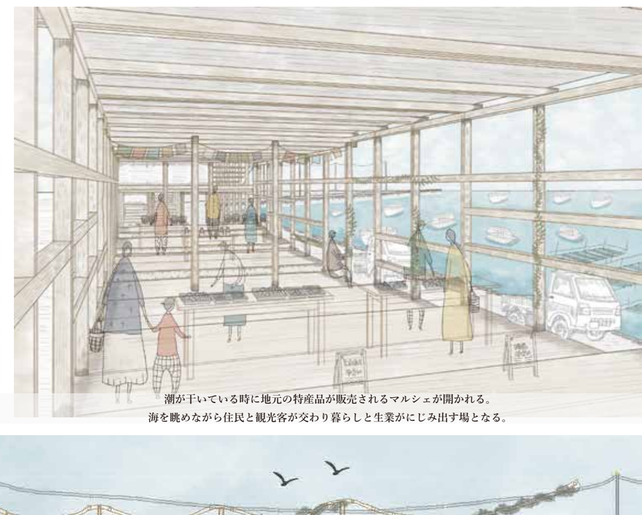
大潮の満潮時、住まいの足元まで水面が近づき住民の日常が水際へとにじみだす
暮らしと海が最も近づくこの場は潮と暮らしが重なる緩衝となる。



軒下の通りから潮が満ちていく様子や海の流れ、支柱式養殖、船の動きが日常的に見える。
移動のための廊下は、潮位を読み暮らしと生業を繋ぐ半屋外空間になる。



牡蠣殻を再利用して作られた雁木に、船が寄りつき水辺にヒトの動きが生まれる。
住民、観光客、漁業者が潮の高さを共有し、交わることで暮らしと生業を繋ぎ地域に開かれた場になる。



潮が干いている時に地元の特産品が販売されるマルシェが開かれる。
海を眺めながら住民と観光客が交わり暮らしと生業がにじみ出す場となる。

